News & Scope
Handai Hospital
阪大病院ニュース
第11号
発行／大阪大学医学部附属病院広報委員会（総務課）
http://www.hosp.med.osaka-u.ac.jp

禁転載　（この紙面は再生紙を使っています）

住所／〒565-0871大阪府吹田市山田丘2-15　TEL／06-6879-5016

医療の安全と質の向上へ

事故防止に万全の体制

阪大病院では、病院のコンピューターネットワークを用いて医療事故には至らなかった「ヒヤリ・ハッと事例」を収集する、インシデントレポートシステムを導入して3年が経過しました。これまでに蓄積した情報や他院での医療事故を教訓にして事故防止のため数々の対策をすすめてきました。その具体例を紹介します。

インシデントレポートの成果

【患者さま誤認防止】

阪大病院は、毎日3000人を超える患者さまを診療していますが、中にはよく似た名前の方も多くおられます。患者さまの協力のもとに、外来ではフルネームを名乗っていただき、入院時はネームバンドを装着していただくことにより、患者さまを間違わないようにしています。

【異型輸血防止】

間違った血液型の輸血をすると、命にかかわることがあります。そのようなことがないように、何重ものエラー防止策をとっています。

血液型判定など輸血に必要な血液の検査は、輸血部が24時間体制で行っています。輸血をする時には、病棟で血液バッグについているバーコードをコンピューターで読み取り、誤った血液型のバッグの場合には、コンピューターの画面に警告が表示されます。また、輸血を受けている患者さまには、点滴の支柱台に大きな血液型プレートをつけて、はっきりわかるようにしています。

【転倒・転落防止】

患者さまがベッドから転落する危険性をいち早くナースセンターで知るために、「うごき君」や「離床センサーマット」と呼ばれる感知用具を使っています。ベッドからの転落事故を防止するためには、高さの低いベッドや特殊なベッド柵を導入しています。また、万一ベッドから転落した場合に備えて、衝撃を和らげるマットを病室の床に敷くなどしています。さらに、患者さまにもすべりやすいスリッパなどは、はかないようにお願いしています。

異型輸血防止のためのコンピューターによるチェック

異型輸血防止のための血液型プレート

【抗がん剤投与量のチェック】

抗がん剤の投与量エラーの原因として、投与日数の間違いや投与量の計算間違いなどがあります。このような間違いを防止するために、複数チェック体制の構築に取り組んでいます。代表的な化学療法に関しては、抗がん剤の種類、投与日数、投与量を記載した投与計画書（プロトコール）をあらかじめ作成し、投与量の計算式とともに、コンピューターに登録します。さらに、病棟看護師、および薬剤師ともプロトコールを共有し、医師だけでなく複数の職種で確認ができるようにしました。

【ルート誤接続防止】

以前は、経腸栄養剤や流動食を投与するための胃管と、点滴用チューブは、見た目や太さがそっくりのうえ、経腸栄養液のための注射筒は点滴用チューブに接続できるようになっていたために、経腸栄養液を点滴用チューブに注入する危険性がありました。

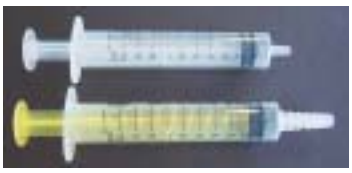
このような誤接続をなくすために、阪大病院の医師とメーカーによって開発された、胃管にしか接続できない先の太い専用注射筒が商品化され使われています。

【手術時の遺残物のチェック】

手術では非常に多くのガーゼ、スポンジ、手術器械を使用します。中には、直径が1㍉以下の非常に細い針糸もあります。これらの数を、手術の前後できちんと確認するとともに、手術終了時に医師で確認してから、開胸、開腹手術では全例、それ以外の手術では必要に応じてレントゲン撮影を行い、遺残物がないことを2人の手術を終わるようにしています。

ルート誤接続防止のための医療用具

㊤点滴・注射用のチューブ類
㊦胃管（経腸栄養）用のチューブ類


㊤点滴・注射用の注射器
㊦胃管（経腸栄養）用の注射筒

患者さまと情報共有

事故のない、質の高い医療を提供するために、診療に関する情報を患者さまと共有し、また、患者さまの声を日々の診療に反映できるような体制を整備しています。

正確な病状を伝え、治療法やリスクを十分に説明し、納得して診療を受けていただけるようインフォームド・コンセントのための指針を作成しました。

また、診療記録の開示も積極的に行ってきています。診療記録の開示をお求めの際には、主治医や医事課の窓口にご相談下さい。

さらに、病院のアメニティや診療の内容についての患者さまからの声、要望、苦情、相談などをお聞きするために、外来部門及び病棟には「御意見箱」を、医事課には「患者相談窓口」を設けています。患者さまの声は、関係部門にすみやかに伝え、院内掲示板を通じて、または患者さまに直接回答するようにしています。

中央クオリティマネジメント部を設置

患者さまの安全と医療の質の向上を推進

医療の安全と質の管理を行うために、今年4月に中央クオリティマネジメント部が設置されました。

同部は患者さまに安心して医療を受けていただくために、病院内での医療ミスや事故を限りなくゼロに近づける施策を行うとともに、全国42の国立大学病院でつくる医療安全管理協議会の事務局を担当します。

医療安全管理協議会は、病院間で患者さまの安全確保に必要な情報を共有するとともに、リスクマネジャーをはじめとする人材育成や社会への情報発信などを行うことを目的としています。

また、今年度から入院医療費の包括評価制度が導入され、来年度には国立大学病院は独立行政法人化が予定されています。医療の質を低下させないで、効率的な医療の提供を行うため同部では医療の安全確保を基礎として、さらに医療の質の確保を行います。そのために、さまざまなデータを収集・解析し、患者さま中心の医療が実践できる病院機能の強化を図ります。

阪大病院 全館禁煙に向けて

本年5月健康増進法が施行され、公共施設における分煙が義務づけられましたが、人々の健康を守る病院は率先して禁煙活動を進めるべきであると考えられます。特に、喫煙者が吸い込む主流煙に比べ火のついたたばこから出る副流煙には有害物質が高い濃度で含まれていることから、受動喫煙の害が大きな問題となっています（表）。阪大病院もこれまで1階に喫煙室を設け、分煙を実施してきましたが、今後、全館禁煙を進める予定です。ご理解とご協力をお願い致します。

喫煙者が吸い込む主流煙と火のついたたばこから出る副流煙の成分の比較（米国健康教育福祉省ほか）

たばこの煙に含まれる有害物質		
物質名	性質	主流煙に対する副流煙の含有量
ニコチン	有害物質	2.8倍
ナフチルアミン	膀胱発がん物質	39.0倍
カドミウム	発がん物質・肺気腫	3.6倍
ベンツピレン	発がん物質	3.9倍
一酸化炭素	有害物質	4.7倍
ニトロソアミン	強力な発がん物質	52.0倍
ちっ素酸化物(NOX)	毒性	3.6倍
アンモニア	粘膜刺激・毒性	46.0倍
ホルムアルデヒド	粘膜刺激・せん毛障害・咳反射	50倍

楽で安全ながん治療
外来化学療法室設置へ
準備体制が完了

抗がん剤治療（化学療法）というと、必ず入院が必要で、苦しくて危険というイメージがあり、患者さまはできれば避けたい治療と考えておられるのではないでしょうか。しかし、最近では副作用などを抑える支持療法が発達し、従来に比べて飛躍的に楽に、しかも、安全に実施できるようになってきました。このような背景で化学療法は外来で行われるようになってきました。

昨年度に調査をしたところ、阪大病院では1週間で98例、年間では4700例もの化学療法が外来で行われており、外来化学療法の社会的ニーズは高くなっています。

しかし、外来では化学療法専属の医師がいないために、外来で予診や診察している医師が抗がん剤を投与し、その調剤や投与中の患者さまの管理などは外来の看護師が行っていました。しかし、外来業務を担当しながらの兼務ですので、医療の安全面からも問題があります。また、抗がん剤の調剤は危険が伴うために、薬剤師が安全キャビネットの下で防護服やグローブを着用して行うことが理想的です。

このような、問題点を改善して、安全で質の高い外来化学療法が行えるように、院内に「外来化学療法室設置準備委員会」が発足しました。

外来化学療法室が設置されれば、化学療法専門の部屋と専属の医師、看護師、薬剤師を確保し、高度で安全な抗がん剤による治療が行えるようになります。

また、化学療法室にはリクライニングチェアを置き、患者さまのプライバシーを守るのみならず、リラックスできる快適な環境を提供したいと考えています。

診療科の垣根を越え、医師、看護師、薬剤師が協力して、患者さまに外来で最高の化学療法を受けていただくために、委員会で理想的な外来化学療法室を検討し、一日も早く実現するよう努力しています。

眼科治療の最先端
難治性眼疾患に大きな成果
黄斑変性 角膜再生医療 人工視覚開発

阪大病院の眼科では、治療が難しく、治りにくい目の病気に関して、再生医療などを応用した先端医療によって完治させる試みをしています。注目されている三つの先端医療を紹介しましょう。

わが国の失明原因の1位になっている黄斑変性は、網膜にある黄斑と呼ばれる視力など目の機能に重要な役割を果たす部分が変性する病気です。特に血管新生黄斑変性は加齢や強度近視が原因となって、黄斑部が脈絡膜新生血管によって障害される極めて治りにくい病気です。

眼科では、世界に先駆けて、黄斑部の位置を網膜の正常な部位へ移動させる中心窩移動術を開発しました。すでに多くの患者さまに行い、良好な臨床成績を収めています。

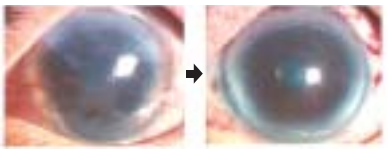
次は、角膜提供者が少なく、拒絶反応などの問題もある角膜移植に替わる画期的な治療法として注目されている角膜の再生医療です。

すでに、テレビや新聞などでも多数報道されましたが、角膜のもととなる患者さまの角膜上皮幹細胞または口腔粘膜上皮幹細胞を採取します。その細胞を培養してシートを作ります。その細胞シートを角膜上皮の病気の患者さまに移植する手法を世界で初めて開発しました。倫理委員会の承認を得て、臨床応用を開始しており、世界初の臨床例（4例）の術後成績は良好です。

最後に、網膜内埋め込み型の人工視覚の開発と電気刺激による視神経障害の抑制法を紹介します。網膜の視細胞が障害されて失明した場合、現在のところ治療手段がありませんが、網膜にチップを埋め込み人工的に視覚を回復させようという先端医療です。

現在網膜チップを開発中ですが、その研究の過程で電気刺激が神経節細胞が死ぬのを抑制することを発見しました。電気刺激で視神経の病気の進行を抑制できる可能性があり、やはり世界初の臨床応用を行いたいと考えています。

患者さまのために先端治療を実現させるのはもちろんですが、安全で質の高い治療を行うために、EBM（科学的根拠に基づいた医療）に基づいた効果的な診断と治療、患者さまへのインフォームド・コンセントの充実、リスクマネージメントの十分な配慮など総合的見地に基づいた医療を継続し、さらに発展させていきたいと考えています。



65歳男性、眼類天疱瘡に対する自己培養口腔粘膜シート移植術

医師、看護師とも阪大病院が好評
患者さまアンケート

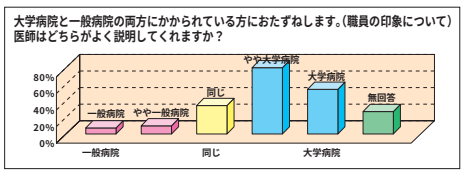
第9号に続いて、全国42国立大学病院中15の国立大学で行われた「患者さまアンケート」の阪大病院分の中から「職員の印象について」を紹介します。

阪大病院と一般病院の両方にかかっている患者さまを対象に「職員の印象」について答えていただきました。

その結果、医師、看護師とも多くの患者さまから一般病院より阪大病院の方が「優しく」「よく説明してくれる」との回答をいただきました。

阪大病院では、インフォームド・コンセントに関する指針を定め、患者さまの立場に立った適切な医療の実践を目指して、患者さまに病状などをわかりやすく説明する努力を続けており、患者さまにもそのことを理解していただいたものと考えています。

この結果に満足するのでなく、励ましの声と受け止めより一層、患者さまのご支持をいただける病院づくりに努めたいと思います。



ひとこと
豊中市薬剤師会　会長　前　武彦

豊中市の薬局には、阪大病院をはじめ、いろいろな病院、診療所、開業医から、さまざまな患者さまのさまざまな処方箋が届けられます。医薬分業は患者さまと薬剤師との信頼関係の上に成り立っていますので、その信頼を裏切らないように、豊中市薬剤師会では、薬に関する新しい知識を積極的に研究するなどの勉強会を定期的に開いています。

信頼される薬剤師に

患者さまのクオリティ・オブ・ライフ（QOL＝生活の質）をよりよくするために、かかりつけ医をはじめ、看護師、栄養士や理学療法士など多くの専門家がかかわっています。薬剤師もその一人です。

薬剤師はQOLを確保するために、処方箋をもとに、正確に調剤することはもちろん、薬を服用するうえで必要な情報を提供し、副作用が極力出ないようにしています。しかし、それが、「大きなお世話」と、感じる患者さまもおられます。

また、患者さまのためを考えて、どのような薬を飲んでおられるかを記録していますが、それがプライバシーの侵害ととられることもあります。

患者さまによって対応を替える必要があり、薬剤師にはマニュアルがないと言われています。どのような患者さまにも対応できるように、患者さま一人一人を理解することはもちろん、日進月歩の医薬情報を研究する必要もあります。

豊中市薬剤師会では、自主的に月2回の勉強会を開き、患者さまから信頼される「かかりつけ薬局」となるように努力しています。

ホスピタルミニニュース

6人が「ふれあい看護体験」

ナイチンゲール生誕の「看護の日」（5月12日）を記念して、当院病棟で看護師の仕事を一般の人に体験してもらう、「ふれあい看護体験2003」を行いました。

22歳から26歳の6人が参加。午前中は看護師と一緒に、検温や血圧測定、足浴、シャワー介助、車イス護送、患者さまとの会話、昼食の配膳などの看護体験をしました。

昼食は病院職員とともに給食を食べ、午後からは、保健医療福祉ネットワーク部、ベッド洗浄や病歴管理室、院内学級などを見学しました。

参加者は看護師の仕事の大変さと“看護の心”を実感され、福岡看護部長から「参加証」を手渡されると、笑みがこぼれました。

一方、外来では、エントランスホールで、血圧測定、体重・身長測定、栄養相談が行われ、延べ250人の人が測定や健康相談をしました。

また同時に入院患者さまの俳句や絵画を、エントランスホールに、1週間展示しました。院内学級の子供たちのメッセージは看護に対する感謝にあふれていました。

今秋にも院内PHS導入

医師や看護師などの病院職員には、患者さまの容態急変や急用があるときなどに素早く連絡しなければなりません。阪大病院では、緊急連絡用に医療機器などに影響を与えることの少ないPHSをこの秋にも本格的に導入する予定です。

これまではポケットベルを使っていましたが、すぐに会話ができずに、緊急時に問題がありました。携帯電話は電波によって様々な医療機器に影響を及ぼす恐れがありますが、PHSは電波の出力が小さく、通常の使用では実質的に電波障害を発生させないために、病院内でも使用することができます。

病院内でのPHS利用には、職員への連絡以外にも、ナースコールシステムと連動し、患者さまからの呼び出しにPHSで応答できる利点もあります。現在、東3階病棟で実験的に導入していますが、ナースステーションを離れて仕事をしていても、ナースステーションに戻らず、すぐに応答できますので、大変評判が良く、このシステムを全病棟に導入したいと考えています。

また、患者さまの中にも院内で携帯電話が使えないために不便を感じられる方もおられるので、患者さまへのPHSの貸し出しサービスも検討しています。

デイルームに自販機設置

病棟各フロアのデイルームに清涼飲料水の自動販売機を設置しました。

これまでは、自動販売機の設置されているフロアが限られており、患者さま、ご家族にご不便をおかけしていました。

今後ともさらに、入院患者さまが快適な入院生活をおくれるように、病棟を整備していきますので、改善してほしい点をお伝えください。

質問箱

Q 外来での検査やレントゲンなどの受付時間や受付方法はどうなっていますか。

A 外来では診察を行う医師が、病状の診断のために各種の検査を、臨床検査部や放射線部に依頼します。依頼はコンピューターによって行われ、患者さまには医師が、検査についての注意事項や解説の書かれた説明書を渡して、どこに、いつ行けばいいか指示します。

また、その説明書には、検査の場所や受付時間も書かれていますので、医師の指示通りに、それぞれの受付に直接、診察券を出して、検査を受けてください。

予約の必要な検査は、担当医が検査の説明をしたうえで、日時を指定しますが、診療時に予約ができない場合は、予約がとれ次第患者さまにご連絡させていただくこともあります。

受付時間は、臨床検査部は午前8時半から午後2時半、放射線部は午前8時半から午後3時半（一般撮影は午後5時まで）となっています。